

三愛ドリームセンター

所在地 中央区銀座
用途 店舗
竣工年度 1963年
所有者 (株)三愛
設計者 (株)日建設計
施工者 (株)竹中工務店
維持管理者 (株)三愛



〔審査評〕 このビルは、昭和38年（1963年）、日本が高度経済成長の助走期を終えて、まさに離陸期にかかろうとする時に建設された商業ビルである。オリンピックの前年、東京では、道路、高速自動車道、地下鉄等のインフラストラクチャー及び都心の建築が槌音高く建設され、建て替えられており、街はたくましい活気に満ち満ちていた。その活気を象徴するように、東京は銀座4丁目交差点の一角に出現したこのビルは、交差点に向かって光を放つ、文字通り全館が光の塔であった。透明な曲面ガラスで覆われた円筒の塔の上階には、光り天井に照らされた庶民の憧れのマイカーが展示され、屋上の建物と同じ円筒状の巨大なネオン塔とともに人々を驚嘆させた。

またこの土地が、高い地価の場所にもかかわらず、建物の1階廻りは、空地を残して計画されており、銀座の中心地で創出されたこの空地は、銀座を訪れる人々に親しまれ、建物と共に一躍名所となっていった。

以来30年この建物は、世の経済の浮き沈みにもまれ、ネオンが消されたり、テナントが変わったりしながらも、交差点を照らしつづけてきた。

建築は磨き込まれたステンレスのカーテンウォール部材や中心部廻り階段の手すりなど、当初の各部の詳細が丁寧に保全されている。また設備は狭隘な建築の中の狭隘なスペースに、コンパクトに設置されているが、管理者の努力によってよく維持管理されている。

ただ、内部の売場の仕様は、この建築のもっているイメージ上の価値に対して、意外に無頓着と感じられるところもあった。審査会では、日本の商店街の象徴である銀座通りの中心の施設で、商業建築の象徴的建築であるというイメージとは少し離れた内容になっているという意見もあった。

しかし、そういう指摘があっても、いわゆる多くの商業ビルの質を越えるこの建築が、向かいの対照的ともいえる石造外壁の和光ビル（第1回 BELCA 賞 LLB 部門表彰物件）と共に形成する銀座4丁目交差点をいつまでも親しみのある象徴的商業空間として保ちつづけてほしいと願う。

以上により三愛ドリームセンターは BELCA 賞 LLB 部門の授賞に値する優れた建築である。